

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ダメ人間が幻想入り

【作者名】

クロワッサン

【あらすじ】

あるところに何をやっても2流止りの少年、一椿水面《つばきみなも》がひょんなことから幻想郷に入ってしまうお話。それしか考えてない。

幻想入りのプロローグ

―とある教室

ルックス2流、運動神経2流、学力2流、その他諸々2流。何をどう頑張っても2流で躓き、やってきた空手・野球・水泳・書道は全部投げ出した。そのためか性格が10段階評価の1が付くレベルまで歪んだこの俺は現在、高校1年生の入学生テストを受けた直後だ。まあ、何をやっても2流だが、逆にそれは『どんなことでもある程度はこなせる』ということなので、一応学区のトップ高校に通っている。嫌味かもしれないが、中学くらいの勉強なら2流の才能で十分なんとな。が、高校の勉強はそうはいかないだろうな。入学生テストもある程度は解けた。親には怒られないし文句もないだろう。大学も国立の適当なのに入って、就職も適当な会社に入って、結婚も適当にするかな…なんていうビジョンすら出来上がってしまったている。

そんなことを考えていると先生が入ってきた。

「今日はこれでおしまいです。明日はオリエンティングなので遅刻しないように…では、さようなら」
のんびりと教室から出た。

―駅への道の途中

俺の趣味は寄り道だ。あんまり来たことないところは本当に楽しい。が、今回は違った。

「おい、てめえ見かけねえ顔だな。どこの高校だ？」

「制服見てわかんないのか？」

(と言っても着崩してるし中にパーカーまで着ているがな)

「てめえ…馬鹿にしゃがって！おい、お前ら、袋にしちまえ！」

「はい…」

「はっ」

後ろから棒状の何かで殴られてここから記憶がない。

―森の中

あれから何時間経ったのか。もう夜だった。

「痛…ちくしょーっかここ何処だ…?」

おおかたあの馬鹿どもが適当に運んだんだろう。と、2流の推理小説にあるような推理をかましていると、目の前に古ぼけた小さな社台があった。

(俺の人生のこれからに転機があるようにお祈りしとくか…)

カバンに突っ込んであった飴を取り出して、社台の捧げ物をおくところ置きながら…

「退屈なこの人生に転機が訪れますように…」

『その願い叶えてやるっ…』

「え?」

次の瞬間、俺は社台の中に吸い込まれた。

―博麗神社・境内

次に目が覚めると、俺は神社の境内にいた。空は少し白んてる。

「じじ…何処だ?」

大の字に寝転がったまま俺は呟いた。

「おっさいつせーん…」

が、少女の鼻歌交じりの歌声と鳩尾を踏まれたことによりそれは声の無い断末魔に変わった。

「ーッ…」

「!？」

少女の方は驚いた顔に。俺は苦悶の表情に。そして、少女は口を開いた。

「よかつたら…お茶飲んでく?」

人をふんどいて第一声がそれですか!?

これが博麗霊夢との出会いだっただ。

―博麗神社・座敷

「いざー、いざめんね。まちかいるとは思わなくて」

「他にもいた時があるのか…?」

「あるらしいのよね」

「はあ?」

「私が見たのはあなたが始めてよ。うちの境内に転がってるのは」

「外の…世界?」

「そうよ。あんたが今までいたのは外の世界。ここは幻想郷よ」

「げんそうきょう…?」

「まずい、頭がついていかない。」

「ま、そういうことなのよ」「ドヤあ

「何故にドヤ顔?」

「いいじゃない、別に」「ニッ」

「はあ」

「なによ、この博麗の巫女自ら懇切丁寧に説明してあげてるのに」

「ああ、ありがとう」

「心がこもってない!」

「ありがとうございます、えーと…博麗の巫女様」

「霊夢よ」

「は?」

「はじゃなくて、博麗^{はくわい}霊夢^{れいむ}よ」

「ああ、ありがとうございます、博麗霊夢様」

「それでよろしい」「ニッ」

何なんだこいつは